

國學院大學学術情報リポジトリ

「たまプラーザ宇宙の学校 2018」報告：
自分たちの活動であるという当事者意識をもって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀江, 紀子, 柴崎, 和夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001390

〔報告〕

「たまプラーザ宇宙の学校 2018」報告

—自分たちの活動であるという当事者意識をもって—

堀江 紀子 柴崎 和夫

【要旨】

國學院大學人間開発学部学部活性化事業「花咲くプログラム」の1つである「たまプラーザ宇宙の学校」を、平成22年度から横浜たまプラーザキャンパスにて開催してきた。NPO法人「子ども・宇宙・未来の会」(KU-MA) およびJAXA宇宙教育センターとの共催事業でもある。「たまプラーザ宇宙の学校」の特徴は、年5回のスクーリングや、スタッフによる学部イベント参加などを、学生スタッフが中心となって運営していることにある。9年目の本年は、スタッフ1人1人が当事者意識をもって行動できる、安定した組織体制となった。

本報告は、学生達の動きを中心に、実施プログラムの概要、参加者の感想、そして学生自身の振り返りをまとめた。

【キーワード】

理科教室 親子共同学習 地域貢献

1. はじめに

「たまプラーザ宇宙の学校 2018」の定例報告である。9年目を迎えた本年も、教員はサポート役に徹し、学生を主体とした活動を目指した。運営を牽引していくのは3年生であり、今年度の1年生から3年生までの登録スタッフは50名であった。

なおこれまでの経緯については、昨年までの報告⁽³⁾⁽⁴⁾⁽⁵⁾⁽⁶⁾⁽⁷⁾⁽⁸⁾⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾を参照して頂きたい。

2. 「たまプラーザ宇宙の学校 2018」の概要

1) 広報：広報よこはま青葉区版4月号、本学部HP⁽¹⁾、子ども・宇宙・未来の会 (KU-MA)

HP⁽²⁾、近隣小学校6校1年生～4年生約2500人への募集チラシ配布

2) 応募状況：午前の部（小学校1、2年生と保護者）156組（抽選で66組に）

午後の部（小学校3、4年生）101人（抽選で78人に）

3) 登録学生スタッフ：50名（1年生15名、2年生30名、3年生5名）

4) 主催：國學院大學人間開発学部 宇宙の学校プロジェクト

共催：NPO法人「子ども・宇宙・未来の会」(KU-MA)、JAXA宇宙教育センター

後援：横浜市青葉区

5) 企画実施状況

表1 各回の実施状況（すべて日曜日）

	第1回 5/27 開校式		第2回 6/24		第3回 7/22		第4回 9/23		第5回 10/21 閉校式	
	午前	午後	午前	午後	午前	午後	午前	午後	午前	午後
開催場所	体育館アリーナ		410教室		410教室 野球場		410教室		410教室	
ミニ講演・ お話	宇宙の学校とは		飛ぶ種の話		皆既月食の話 ロケットクイズ		月食の話 火星と土星の話		オリオン座流星群の話 月と地球の大きさ比べ	
プログラム 1	熱気球		アルソミトラの種		ペットボトル ロケット		傘袋ロケット		ブーメラン	
プログラム 2			ふわふわ風				ゴムカタパルト 紙飛行機		レポート発表	
参加者数	60組	73人	58組	69人	56組	65人	51組	60人	42組	56人
学生 スタッフ	20人	20人	24人	24人	24人	24人	22人	22人	22人	22人

昨年同様「たまプラーザ宇宙の学校 2018」開催の様子は、國學院大學人間開発学部のホームページとKU-MAのホームページで確認できる。最終回に参加児童が発表した、家庭で実施した実験・工作のレポートも、KU-MAのホームページに、これまでの分も含めすべてが掲載されている。

6) たまプラーザ宇宙の学校スタッフによる参加企画

表2 10/28（日）【第10回共育フェスティバル】における参加企画

プログラム	飛び出す!? 空気にふれてみよう！（空気砲の実演と体験）
場所	410教室
時間	第1回10:10～10:40、第2回10:50～11:20
	第3回11:30～12:00、第4回13:30～14:00
	第5回14:10～14:40、第6回14:50～15:20
参加者数	全6回合計338人（子ども169・大人169）
学生スタッフ	14人

2.1 学生スタッフ組織作り

たまプラーザ宇宙の学校プロジェクトは9年が経過し、本学部学生にとって学部プロジェクトとして安定した組織となった。前年11月に3年生の中で話し合いを行い、代表1名を決めた。3年生スタッフは5名と少人数のため、全員で補い合えるようにと、副代表には2年生数名をおいた。本学部の学生たちは、他の学部プロジェクトやサークル、学生企画委員会^{*1}などの様々な団体に積極的に所属し、それぞれ中心的な活動をしている者が多い。そのため、日曜日でも他の団体活動に赴く者もいる。お互いにどの団体に軸足を置くかを考え、不在時には補い合いながら活

動を回している状況であった。

5名の3年生は全員が前年度からの継続者で、教育実習^{*2}の時期を考慮しながらスクーリング各回のリーダーを決めていった。この際、3年生が少人数であるため、昨年度の活動を経験している2年生30名の中からリーダーを募った。15名の1年生も参加意識は高く、積極的にリーダーを引き受ける者もいたことは心強い限りであった。

当日までは、各回のリーダーを中心に学生達がLINE^{*3}などのSNSを利用して、準備段階での連絡、運営を行っていった。例年同様、月曜日と木曜日の週2回の昼休みを定例会とした。定例会への参加率は概ね好調で、ここで必ず次回の実験や制作を行い、手順の確認や、児童・保護者に考えさせるポイントを確認した。

3. 対象参加者について

今年度も小学校1、2年生とその保護者を対象とする午前の部と、小学校3、4年生を対象とする午後の部を開催することとした。午前の部では、昨年度同様スクーリング当日は親子共同で実験・制作に参加できるような働きかけをし、午後の部では、見知らぬ参加者同士が協力して作業をしたり、制作を楽しんだりする活動を視野に入れて行った。

今年度の応募状況は、午前の部（1、2年生の児童と保護者）66組募集に対し156組、午後の部（3、4年生の児童）78人の募集に対して101人の応募があった。最終的には抽選により午前の部66組、午後の部78人を選んだ。スクーリングを6グループで行うため、6の倍数とした。また、今年度も午前の部に関しては1組につき参加保護者は1名とした。作業スペースの問題に加え、傍観したり、わが子の写真撮影に熱中したりしてしまう保護者がいるためである。

募集の周知は例年行っている「広報よこはま青葉区版4月号」への掲載に加え、近隣小学校6校の協力を得て、対象学年全員へのチラシ配布を行った。参加者の居住地域は、横浜市では青葉区が中心だが、川崎市、練馬区、渋谷区、世田谷区、江戸川区在住の小学生の応募もあった。また、例年同様私立小学校からの参加者もあった。

4. プログラムについて

4.1 全5回通常プログラム

「たまプラーザ宇宙の学校」のテーマが『飛ぶ、飛ばす』こと、である点は例年通りであった。今回全5回のスクーリングで行ったプログラムは表1のとおりである。

第1回：今年度も体育館アリーナで開催し、開校式の後、「熱気球」を打ち上げた。参加者同士が共同作業を実施することにより仲間意識を持ってもらい、以後のスクーリングでも皆が当事者として参加してもらうことを狙っている。後述するアンケート結果でも、「熱気球」は保護者の満足度が高いことが示されている。「熱気球」は1200Wの家庭用ドライヤーで揚げることができる。子どもは、暖かい空気が気球の中に送られるのを肌で感じる事ができ、暖かい空気が上

に行くことで気球が揚がるということを実体験として体感できる。例年毎回1班ずつ順番に揚げていたが、せっかく作ったのだから最後にもう一度6班一斉に揚げてみようというスタッフから案が出され、本年は実施してみた。実際に6個の気球が体育館アリーナを浮遊する姿は壮観ではあった。しかし、上手に揚がった班とそうでない班がでてしまった。一度気球の中に入った空気は、打上げ後に冷えてしまう。気球内部に残った空気をしっかり全部追い出してから、再度熱い空気を入れないと、当然揚がらない。スタッフが「熱気球」の原理を理解していれば気づくことである。

第2回：発泡スチロールを薄く削り紙状にした素材を使った2種類の制作である。熱帯植物アルソミトラの種は飛行する種として知られ、高い樹木からグライダーのように滑空して飛散する。これを模した制作物「アルソミトラの種」は、高いところから落とした方が長く滑空する。それに気づいた参加者は、子どもを抱き上げたり肩車をしたりと工夫を凝らしていた。同じくこの素材で作る、歩く速さで揚がる「ふわふわ凧」は安定のプログラムである。

第3回：真夏の屋外での「ペットボトルロケット」。例年球技場で行っていたが、施設の都合上、今年度は野球場を使用した。“生命にかかわる暑さ”と表現された今年度の夏の屋外での活動には、熱中症対策へ細心の注意を払う必要があった。参加者が集まった時点で体調確認を行うこと、野球場に氷水を用意し必ずタオルをひたして首にかけること、打ち上げは1人1回とすることなどを決め、経口補水液を用意した。また、教室から野球場まで、班ごとの移動の導線を細かく決め、屋外での待ち時間を極力なくした。午前の部は保護者も同伴しているので目が行き届いていたが、小学生だけが参加する午後の部には、スタッフは特に緊張感をもって臨んだ。結果として、昼食をとってこなかった4年生女児が1人、少し気分が悪くなってしまうということがあったが、すぐに対症策を施し、保護者に連絡を取り軽症ですんだ。1人1回の打ち上げであったが、保護者、児童共に、参加者満足度第1位のプログラムとなり、思い出に残ったようである。昨年度課題となった2枚羽で機体が安定しないという問題点は、3枚羽として解消した。これを再利用して夏休み中に改良を施し、家庭で実験を行いレポートを作成した親子もいた。

第4回：1つ目は定番「傘袋ロケット」。近年、試行錯誤する肝心の考える部分が薄くなってきているのが毎年の課題としてでているが、これは会場の狭さに要因することがわかってきた。制作の過程で、何度も試射し飛び方を考えるのがこのプログラムの醍醐味であるのだが、使用している教室にはその試射が十分できる広さがない。体育館などで行うほうがこのプログラムの面白さを引き出せるだろう。2つ目は新プログラム「ゴムカタパルト紙飛行機」である。A4用紙と輪ゴム、割りばしという身近なもので簡単にできる制作で、上手に飛ばせば飛距離も伸ばせる。しかしながら、やはり教室の狭さがネックとなり、参加者にあまり楽しさが伝わらなかった。

第5回：「レポート発表」がメインプログラムであるため、その前に「月と地球の大きさ比べ」と手軽に作れる「ブーメラン」の制作を行った。昨年は3枚羽のブーメランであったが、うまく飛ばすのが難しかったため、今年度は2枚の紙帯を十字に重ねた4枚羽とした。投げ方のコツさ

えつかめば、きれいに弧を描いて戻ってくる。簡単で手軽な制作である。「レポート発表」では夏休みの自由研究を兼ねた力作が増え、子どもだけの知識や方法ではまとめられないような内容のものが多くなっている。午後の部では、「レポート発表」の時間に合わせて保護者の参観を可能とした。保護者は、わが子だけではなく多くの子どもたちの実験や観察レポートを見ることができた。けれども、「発表」という重圧からか、最終回を欠席したり、当日出席してもレポート発表を棄権したりする児童が毎年増えてきている。主催者としては、どんな実験や制作でも、宇宙の学校の大テーマである「家庭で」「親子で」「一緒に」制作したレポートを、子ども自身の力で発表してくれることを期待している。しかし、地域性もあるのかもしれないが、やるなら完璧に、という保護者の意識と、やってもやらなくてもよいならやらない、という児童の意識が垣間見え、主催者と参加者との思惑のずれが徐々に表面化している。

<全5回スクーリング開催の様子>



第1回『ミニ講演「宇宙の学校とは」』



第1回『熱気球』



第1回『熱気球』



第2回『アルソミトラの種』



第2回『ふわふわ風』



第3回『ペットボトルロケット』



第4回『傘袋ロケット』



第4回『ゴムカタパルト紙飛行機』



第5回『月と地球の大きさ比べ』



第5回『ブーメラン』



第5回『レポート発表』

4.2 スタッフによる番外編プログラム

通常開催のスクーリング以外に、例年スタッフが、「共育フェスティバル」に参加して企画を出している。10/28（日）の第10回共育フェスティバルでは、「飛び出す!? 空気にふれてみよう!」を行った。

例年、当日予約制の制作を5回予定し整理券の配布で人数調整をおこなっていたが、整理券配布時間前に大行列ができたり、整理券をもらったまま来なかったりといった混乱があった。今年度は実演と体験を重視し、制作は行わないこととした。実演では、巨大空気砲でどこまで空気が届くか、スモークマシンを使って空気の弾はどんな形をしているか、空気砲の出口の形によって空気の弾の形に影響はあるのかなどを確認した。その後は、用意しておいた様々な大きさの空気砲を実際に撃ってみて、体験してもらった。帰りには、家庭で作成できる空気砲の作り方や、空気を使った実験をまとめた小冊子を渡した。



『飛び出す!?空気にふれてみよう!』実演



『飛び出す!?空気にふれてみよう!』空気砲を体感してみる



『飛び出す!?空気にふれてみよう!』空気砲でのあて遊び

5. 学生スタッフの反応

質問「どのような姿勢でスクーリングに臨み、何を得たか」を与え、自由記述とした。18名の学生から提出があった。以下、◆印は学生スタッフによる振り返りの抜粋または略述である。

5.1 1年生スタッフ

- ◆自分から子どもたちに話しかけ積極的にコミュニケーションを図りました。子どもと同じ目線になるために屈んで話す、オウム返しの相槌を打つなど授業で習ったことを実践してみました。
- ◆どのように説明したらわかりやすいか、どうしたら子どもが考えながら活動してくれるか、などまで考えて説明できる力をつけようと、子どもと関わるアルバイトを始めました。
- ◆人に伝わるように教えることの難しさを学びました。
- ◆子供たちは毎回みんなやる気満々で大学に足を運んで来てくれているわけであるから、子供たちには楽しい思いをしてより多くのことを学んで帰ってもらいたい。だからこそ、しっかり責任感を持って準備段階から当日のスクーリングまで取り組んでいくことが重要であると感じた。
- ◆「臨機応変に対応する大変さ」は私がスクーリングから得られたものの中で2番目に大きいものであった。私が1番得られたと感じたことは「計画的に物事を進めていくことの難しさ」である。
- ◆回を重ねていくにつれて子どもの心をつかみ、話ができるようになっていった。それとともに、話す中での子どもの考えの柔軟さには何回も自分自身驚かされました。

5.2 2年生スタッフ

- ◆1年生の見本となり、スクーリング全体の動きも意識しながら行う、準備や話し合いにも積極的に参加する、子どもの疑問や考えを引き出す声かけを多くする、という3点を目標に意識し

て参加した。

- ◆より後輩のサポートに回り、全体を見通せるよう心掛けました。これは、自分が1年生であった時にも先輩方がしてくれていたことであり、（中略）どんどん次の学年へ引き継がれていくべき事だと思う。
- ◆なれない人とのコミュニケーションに少し苦手意識があることが分かった。教職にはコミュニケーションは必須である。来年度の教育実習などにも備え、人とかかわるということや話題作りなどの準備をしようと考えた。
- ◆昨年の経験のおかげか、今年は去年と比べてあまり緊張せずリラックスしてスクーリングに参加することができました。去年より、子供に考えさせるような投げかけをすることができたのではないかと、思います。特定の子どもと話すのではなく、いろいろな子どもと沢山接することができよかったと思います。
- ◆去年の経験を生かして、より子どもと積極的に関わり、子ども理解につなげることを目標に参加してきました。その中で、どうすれば子どもの「なぜ？」や疑問、興味を引き出せるのか、子どもに考えさせ、良い学びにつなげるにはどうすればよいのか、また、子どもだけでなく保護者の方とのかかわり方についても自分なりに考えながら取り組んできました。先輩方の姿から学ぶだけでなく、少しでも1年生の見本となれるよう取り組みました。
- ◆私は3つのことを心掛けてきました。一つ目は子どもたちが「？」と思い、「あ！」と発見できるようにすることを大切に考える。二つ目は、そのためには関係性が大切で、たった5回のなかで、さらに毎回班も違うなかで、子どもたちが活き活きとできるように、たくさんの会話を通して楽しい雰囲気・環境を作る。三つ目は、3年生が少ないこの代で2年生の立場でもできることを考える。
- ◆子どもたちに合わせることを意識して参加した。（中略）同じ班の子どもたちを巻き込むことで班の中でコミュニケーションをとることができ、輪が広がるようにした。子どもたち同士の関わりを多く増やすことで、その後の活動をやりやすくした。
- ◆先輩方や先生が子どもたちとどういう風に関わっているのか観察し、それを模倣したり、自分で考え直して行動に移したりしようと思いながら活動に参加しました。

5.3 3年生スタッフ

- ◆3年目にして最後の年ということで自分自身のまとめ及び後輩の育成を意識して今年度取り組んできました。得られたものは大きく分けると2つで、1つは準備・計画の大切さ、もう1つは子どもとの関わりについてです。（中略）実際にやってみることが重要だということも学びました。（中略）半分先生、半分子どもと同じ目線に立って手立てをしながら一緒に考えられるのがこの活動の魅力だと感じました。これは、きっと学生の立場でしか経験できないことだと思い、だから校長先生はあんなに失敗してもいい、考えることができれば、と仰っていたの

だと気づくこともできました。

- ◆最後のスクーリングでは、スタッフ1、2年生の成長に感動した。自分達で次はどうしたらよいかを考え、創意工夫をしながら取り組んでいた。後輩が主体的に動いていたので安心して自分の班に集中することができた。また、教育実習の経験を生かし児童との距離感を詰め、楽しく活動に参加することができた。得たものは主に2つある。「仲間と協力することの大切さ」と「児童との距離感の詰め方」である。
- ◆代表だから全て行うのではなく、効率的にみんなに仕事を回す大切さを実感しました。

6. 開催結果の評価について

今年度も参加者にアンケートをお願いした。簡単に概要を述べる。

参加者対象アンケート回答数：午前の部 保護者42・児童41、午後の部 児童55

問1) お子さんは何年生ですか？

	午前の部		午後の部
1年生	18	3年生	36
2年生	24	4年生	19

問2) 参加者した保護者の続柄(午前)、参加者の往復の送迎について(午後) - 今回は省略する

問3) 開催情報の入手先

	午前の部	午後の部
大学HP	1	2
KU-MA HP	0	0
その他ネット	0	2
青葉区広報	16	7
友人知人	15	2
家族から	0	20
小学校から	10	22

問4) 参加回数

	午前の部	午後の部
2回	1	1
3回	4	0
4回	9	9
5回	28	45

問3) 応募の動機(記述式) 主な回答

[午前の部]

- ・子どもに宇宙、自然、科学に興味関心を持ってもらいたい 10
- ・子どもが宇宙、科学に興味があり、好きだから 6
- ・子どもが工作、実験が好きだから。 3
- ・考える力を養う機会になれば 2

このほかに、「子どもに沢山の経験をしてもらいたい」「親子で体験できるから」「知らない子ども

の集団と関わらせる機会」「子どもが興味を持つかどうか知りたかった」「親が宇宙に興味があった」などの回答があった。

〔午後の部〕

- ・楽しそうだったから 20
- ・宇宙・実験について興味があったから 13
- ・実験・工作が好き 6
- ・保護者のすすめ 4

このほかに、「近くだったから」「友達に誘われて」などの回答があった。

問4) 応募の動機 - 今回は省略する

問5・6) 最も気に入ったプログラム（複数回答）

	午前の部		午後の部
	保護者	子ども	
熱気球	17	6	11
アルソミトラ	0	1	1
ふわふわ凧	0	4	2
ペットボトルロケット	15	17	24
傘袋ロケット	6	4	7
ゴムカタパルト紙飛行機	1	3	1
月と地球の大きさ比べ	1	0	0
ブーメラン	2	6	10

問7) 自宅で工作・実験をいくつしましたか？ 問8)「宇宙の学校」に参加して良かったですか？

	午前の部	午後の部
1つ	18	25
2つ	9	11
3つ	4	7
4つ	2	2
5つ以上	3	5

	午前の部		午後の部
	保護者	子ども	
とても良かった	31	28	41
まあまあ良かった	10	12	11
何とも言えない	0	0	1
少し期待外れだった	0	0	1
まったく期待外れだった	1	1	0

問9) 来年も参加したいと思いますか？（記述式） - 今回は省略する

来年も参加したいと回答してくれた方が8割以上である。

問10) 感想 主な回答

- ・実験前に知識を教えてくれるのが良かった

- ・様々な実験をしてもっと実験がしたくなった

<学生スタッフについて>

- ・楽しい時間が過ごせた
- ・コミュニケーションが良かった
- ・発表時のサポート（対応）が良かった
- ・生き生きしていて好感が持てる
- ・親切・優しい
- ・刺激があってよかった

7. まとめ — 次年度に向けての反省と課題 —

今年度は牽引力のある3年生代表に引っ張られた活動となった。スタッフである学生たちは、1年次から3年次にかけて、教育ボランティアや教育インターンシップ^{※4}、教育実習を経て学びや経験を深めていく。人間開発学部花咲くプログラムの1つとしての「たまプラーザ宇宙の学校」プロジェクト実施のねらいの一つには、学生スタッフたちが自然や自然現象を、原理から論理的に理解して児童に的確に伝えることができ、さらに、自ら理科の教材を考え、制作することができるようになることを目指す、ことが含まれている⁽³⁾⁽⁴⁾。ここ数年来課題であった手順のマニュアル化や流れ作業化は、参加学生の意識改革により解消されつつあるが、いまだ、調べるより先に聞く、という学生も少なくない。疑問を持ったらずは自分で調べ、理解し、自分の言葉で説明できるようになることが大切であることを指導していきたい。

また、各班6～7人のスタッフがいるにもかかわらず、学生はよく「スタッフが少ない」と口にする。1班1名程度の担当スタッフで始めた創設当時を知る教員側からは、何を甘えたことを、という気になってしまう。これまでスタッフが年々増えたことにより参加者の数も増やしてきた。しかしこれが、現在では教室の狭さも相まって、学生自身のキャパシティを越えている原因なのかもしれない。制作物について、作って終わりではなく、もっとよく飛ぶためにはどうしたらよいかを考えながら何度も改良を重ね工夫することが「宇宙の学校」の本質なのだが、それが教室の狭さによって制限されてしまっている。次年度は活動場所と参加者の数について考慮していきたい。

レポート発表時に参加者が極端に減る、出席してもレポートを持ってこないなどの発表を回避する傾向が徐々に増加している。当日どうしても発表できない児童は、スタッフが手助けして代わりに説明したり、レポートの掲示だけしたりと、決して発表を強制する雰囲気にはしていない。他会場ではどのような状況なのか、情報共有して解決策を練っていきたい。

8. おわりに

「たまプラーザ宇宙の学校 2018」の開催までの経緯、実施状況、成果、反省点と課題を報告し

た。次年度は横浜たまプラーザキャンパスの再開発による工事が予定され、どのような形態で開催できるかは未定である。次年度の学生スタッフについては、11月中旬に代表決めを終え、新体制で活動をスタートしている。学部活性化事業として、大学側と連携し、学生の高い意欲を活かした活動ができるよう、開催に向けて動いていきたい。

最後に、今回のプログラムを成功裏に実施出来たのは、KU-MA事務局五十嵐晴美氏、学生スタッフ諸氏（下記参照）の献身的な努力の賜であった。教育実践総合センター小笠原優子教授には毎年近隣小学校への連絡を行っていただいている。ここに記して感謝する。

平成30年度学生スタッフ（下線は前年度経験者）

- 1年 荒川稜、荒井まこ、岩井萌、植木生真、尾崎翔、小澤奈央、金廣寿々乃、小泉佑夏、
齊藤由佳、座間裕美、立花昌典、棚網夏那、中村楓希、西原大智、益子実佳
- 2年 安生奈菜、上田結子、上田由紀子、永徳隆典、江藤壮史、尾崎美歩、神崎萌乃、北川周、
小島修哉、佐野凜介、澤田大貴、榛葉敦子、染谷美月、高橋菜々穂、高橋美那、田中萌愛、
都築晃輔、十倉日向、新村明子、平尾咲季、藤本智子、船切裕希、堀円香、前田悠貴、
増田裕美、松山ななみ、宮田有優、宮野恵莉香、宮村桃香、横山琴音
- 3年 小林和樹、澤田しおり、鈴木佳奈、本郷花苗、真家陵

参考

- 1) 國學院大學人間開発学部ホームページ；<https://www.kokugakuin.ac.jp/education/fd/human>
- 2) KU-MAホームページ；<http://www.ku-ma.or.jp/>
- 3) 柴崎、堀江『人間開発学研究第2号』2011
- 4) 堀江、柴崎『人間開発学研究第3号』2012
- 5) 柴崎、堀江『人間開発学研究第4号』2013
- 6) 柴崎、堀江『人間開発学研究第5号』2014
- 7) 堀江、柴崎『人間開発学研究第6号』2015
- 8) 堀江、柴崎『人間開発学研究第7号』2016
- 9) 堀江、柴崎『人間開発学研究第8号』2017
- 10) 堀江、柴崎『人間開発学研究第9号』2018

※1 國學院大學人間開発学会では、学生会員（人間開発学部学生）の修学・活動支援の一環として、学生会員を代表する学生企画委員からなる学生企画委員会が組織されており、学生活動支援委員会（正会員〔本学部専任教員〕で構成）の助言・指導を受けつつ協議を重ね、「人間開発学」に関わる事業の主体的な企画立案・運営を行っている。

※2 本学部において、主免許の教育実習を3年次に行う。

※ 3 韓国のIT企業「NHN」の日本法人「LINE株式会社」が提供している様々な形態の携帯機器やパソコンに対応したコミュニケーションアプリケーションソフト。

※ 4 本学部において2年次より開講。地域諸学校との連携による実践体験型実習。

（ほりえのりこ 國學院大學人間開発学部資料室助手）

（しばさきかずお 國學院大學人間開発学部初等教育学科教授）